

ぱきっ。首を回すと、鈍い音が鳴った。

研究室とバイトと、うっすら見えてくる就活への不安。その全部を誤魔化すみたいに、私は鍋をかき混ぜる。

大学院まで進んだのは、選択というより流れだった。

「今さらやめられない」

その癖が、私の一番の弱点だ。頭のいい女は嫌われる？そんなの耳にタコができるほど言われて、もう飽きた。

「ただいまー！」

玄関のドアが勢いよく開く。聞き慣れた声に、少しだけ頬が緩んだ。

望月くん。新卒で入った会社にまだ馴染めず、疲れ切った顔でここに来るようになった大学時代の後輩。

「……だから、ここはあんたの家じゃないって言ってるでしょ」

「でも、ほぼ一緒に住んでるじゃないですか」

キッチンに顔を出した彼は、ネクタイを緩めて、少しだけ子どもみたいに笑った。その笑顔を見ると、追い返す言葉が喉で止まる。

「今日のごはん、なに？」

「カレー」

「やった」

後ろから近づいてきて、腰に腕が回る。暑い。狭い。……でも、振り払わない。そんな自分を見ないふり。

「火使ってるから離れて」

「ちょっとだけ」

ちょっと、が守られたことなんて一度もない。分かっているのに、私はいつも曖昧に許してしまう。

「有馬さん、ネクタイ外してください」

「自分でやりなさい」

「今日は無理です。もう限界」

甘えるみたいな声。この声に弱い、よく知ってるくせに。

ネクタイに手をかけると、彼は大人しく顎を上げた。するりと引き抜くと、ほっとしたように息を吐く。

「ボタンも」

「調子に乗らないの」

「ここまで来たら同じですよ」

意味は分からない。でも、ここで止めたら意識してるみたいで、手がそのままワイシャツに手を掛ける。

ひとつ、またひとつ。ボタンを外すたび、部屋の空気が変わる気がした。

「……もういいでしょ」

「最後まで」

手首を取られる。力は強くない。逃げようと思えば私でも逃げられる。

それでも私は、逃げなかった。

「嫌ならやめますよ」

上から降ってくる声は、脅しなんかじゃない。選択肢を渡してくるのが、ずるいところだ。

黙ってシャツを下ろすと、彼は満足そうに笑った。その顔を見て、首の後ろが熱くなる。

「有馬さんってさ……優しすぎですよ」

「それ、褒めてないでしょ」

「褒めてます。俺には、それが必要だから」

誰にも向けない無防備さを、私にだけ預けてくる。私が拒んだら望月くんはどうするんだろう。そんなことをぼんやり考えることが多くなった。

笑いながら、彼は私の手を離さない。離れない理由を、ちゃんと用意してくれる。駄々っ子は満足そうに脱衣所へと消えて行った。

私は溜息をついて、火を止めた。鍋の底は少し焦げている。

それでも、この距離は。この手の温度は。——悪くない、と思ってしまふ。

色々流されてる自覚はあるが、後ろから抱き着いたり手を握られたり。スキンシップが激しいタイプとはいえ、さっきみたいな過剰なのはちょっと……。

「あっつ……」

望月くんは、同じ学科でサークルも一緒だった二つ下の後輩だ。昔から少し面倒を見てたら、思いのほか懐かれてしまって。気づけば、何かと一緒にいる時間が増えていた。

きっかけは、学食での他愛ない雑談だったと思う。

「有馬さんって、自炊するんですか？ 意外」

「……今、バカにした？」

「してないですよ！ じゃあ今度、食べに行ってもいいですか？」

冗談みたいな軽い口調。断られるなんて、最初から考えていない顔。大型犬みたいに人懐っこい後輩が、可愛くないわけがない。

「あっそ。じゃあ、今日何食べたい？」

「え、マジですか！」

あの時は、ただの思いつきだった。

まさか、このやりとりが何年も続くことになるなんて。

それから、バイトのない平日はほとんど私の部屋で夕飯を食べるようになった。

私が大学院に進んで、望月くんが社会人になった今でも、それは変わらない。

別に心配してるわけじゃない。慣れないスーツで帰宅時間が不規則だからとか。

ただ、暑い中仕事してきているし、汗を流した方が楽だろうと思ってシャワーを貸しているだけ。だって一度も手を出されたことないし。……スキンシップは激しいかもしれないけど。

それだけ、のはず。

洗面所に並ぶ歯ブラシや、部屋着が増えていることについては、見なかったことにしている。

「お風呂ありがとうございました。……うわ、今日のも美味しそう」

いただきます、と手を合わせてから、子どもみたいに料理を頼張る。雑談や、ぽつぽつ零れる仕事の愚痴を聞きながら、料理が次々となくなっていくのを見るのは悪くない。

私は胃袋を掴んだつもりでいたけれど。本当は、この笑顔に私が掴まれているのかもしれない。

大型犬が楽しそうに遊んでいるのを見て癒やされる、そんな感覚。実験ばかりの日々を送る私と、新卒で必死に働く彼。

この時間が続くのは、きっと私が院を卒業するまで。少し焦げたカレーを飲み込む。

「……あ、来週の火曜は夜いないから」

「え、どこか行くんですか？」

「ゼミの飲み会」

「あー……」

露骨に歯切れが悪い。

何？ 味付けが気に入らない？ 焦がしたのはあんたのせいだけだね。

「……あんまり、飲まないでくださいね」

「なんで？」

「だって、酔うと距離近いし、よく笑うじゃないですか」

真剣な声で望月くんは続ける。

「みんな、有馬さんのこと好きになっちゃう。他の人に、あんまり笑わないでほしい」

思わず、言葉に詰まった。私は、そんなに人に好かれるタイプじゃない。ぶっきらぼうだし、顔が怖いって言われることも多い。

そんなことを言うのは、望月くんくらいだ。

「……早く食べなよ」

そう言うと、彼は少しだけ不満そうにしながらも、また箸を動かした。

大丈夫。こんな距離で、こんなふうに過ごしているのは——望月くんしかいない。

食後、並んで食器を洗っているときだった。

「有馬さんって……彼氏、いたことあります？」

静かな声。いつもの軽さがなくて、手を止めてしまう。

「……急にどうしたの」

「いや、こんなに料理できるなら、誰かに食べさせてたのかなって」

一拍置いて、ぽつりと。

「……先越された気がして。なんか、嫉妬する」

冗談めかして笑いながら、彼はスポンジを動かし続ける。でも、その言葉はやけに胸に残った。

少し迷って、答える。

「……望月くん以外に、作ったことないよ」

水の音が、やけに大きく響く。望月くんは一瞬だけ固まって、それから、わざとらしく笑った。

「それ……嬉しすぎるんですけど」

その声は、さっきより少し低くて。なぜか少し、背筋がぞくりとした。

リビングに戻り、テレビをネットにつないで適当な動画を流すと、音のある静けさが部屋を支配した。二人でベッドに凭れて座っていれば、ふと肩に頭を預けてきた。

「どしたの。疲れた？」

「うーん……そうですね」

ぐりぐりと頭を擦り付けてくる。くせっ毛の私とは違ってストレートな硬い髪が首に当たって痛い。反射的に頭を撫でると、こちらを探るような瞳が睫毛の下から見上げてきた。

迷子に助けを求めているような視線。テレビから面白くない芸人のトークが流れているのに、衣擦れの音がやけに響く。

「今日、泊まっていいすか」

「え？明日仕事でしょ？」

「もうここで寝たいー！」

「こらっ、ちょっと！」

ばふっ！とベッドにダイブしたと思えば、毛布を抱えて駄々をこねる  
22 歳男性。

正直見苦しい。下ろそうと腕を引っ張っても、力で適う訳もなく。逆に  
そのまま引き込まれてしまった。

知ってる柔軟剤の奥に混じる、望月くんの匂い。

「だめ、離れて」

胸を押し返しても、押さえ込まれるように脚が絡められた。

「ね、だめ？有馬さん」

ぼそぼそと低く喋る望月くんなんて珍しい。いつもハツラツとしてて、  
元気でうるさいくらいで。

耳に望月くんの熱い吐息がかかる。くすぐったさを悟られないようにグ  
ッと唇を噛むと、甘えた声が流れ込んだ。

「有馬さんの匂い、落ち着くから……。明日も朝早いけど、隣で寝たい」  
「あっ、ねえってば！」

そのまま腕を差し込まれ、背中に手が回りこんでくる。突き放そうと腕  
を掴んでもびくとしめない。鍛えてる身体は厚くて、熱くて。私の反応を  
伺うように顔を覗き込む瞳には、どろりとした欲が見えた。



ゆっくり顔が近づいて、唇が触れた。

いつの間にか空気が甘く重い。もう、テレビの音なんて何も聞こえなかった。

舌が唇をなぞる。息を吸おうと口を開けばそのまま割り開かれて、熱い舌で絡めとられた。

抱きしめられ行き場の無い手で、押し返そうと胸に手を当てる。それが逆効果だったのか回された腕に力がこもり、さらに強く抱きしめられた。

「ん……はあ……」

「もう、我慢できないです。有馬さんが、俺のこと甘やかすから」

低く、掠れた望月くんの声が耳元で囁かれた。その声には明確な欲が滲んでいて、ゾクゾクと全身に電流が走るような感覚に、脳みそが警鐘を鳴らす。

なんとなく目を逸らしていた望月くんの気持ちがぶつけられて、怖い。これ以上進めば、今まで通りじゃいけないのが嫌だ。

そう分かっているのに、求められる手を、瞳を、跳ね返せるほど私は強くない。だって、今さら引き返せないって思ってる自分がいるんだもん。

それを知ってか知らずか、望月くんはゆっくり私のTシャツの裾を持ち、そのまま脱がせた。下着だけの上半身をゆっくり見つめられ、首筋や胸元に熱い舌が這う。

ぞわりと鳥肌が立った。優しい指先に理性が溶かされていく。

窓の外はもう夜の帳が降りきっていて、部屋の中に熱気を閉じ込めていた。

一つ、とへそから胸へ指がなぞる。思わず腰を揺らせば、手が後ろに回って、ぷちっとホックを外された。

露になった頂を焦らすように周りをくるくる遊ばれて、ゆっくり勃起あがる乳首を楽しんでいる様だ。そんなつもりもないのに、ねだるよう突き出してしまふ。

「やっぱ、そんなえっちなことしちゃうんだ」

「ちが……っ！そうじゃ……あっ」

顔を覗き込んでくる瞳は、普段の無邪気に甘えてくる望月くんじゃない。どろりとした欲を隠そうともしない、獲物を捕らえた獣のような目。しかし、何かを切望するような光が見え隠れして、ずるい。

その視線に弱いこと、知ってるでしょ。ずるい。

「会社でどんなに疲れても、有馬さんのこと思い出したら、早く帰りたくて。ずっと我慢してた」

「ま……んっ！あ、はあ……ん♡」

「有馬さん、俺ずっと好きなんです。絶対優しくするんで……いいですか？」

ああ、言われてしまった。もう、うやむやに出来ない。

望月くんは私が好きで、こういうことをしたいって言われちゃったら、変わらなきゃいけない。

私は黙って首を縦に振った。

呑み込まれるようなキスが始まり、舌で上あごを擦られる。ぞわぞわして身体を振っても、大きい手が脇腹を這って力が抜けた。そのままピンッと勃起あがった乳首に触れられたとき、快感が背筋を走る。

「あうっ！？う、んん！ふ、はぁ……ッ♡」

「おっぱい気持ちいいですか？」

「い、わないで……ッ！んあっ♡」

「あは、えっろ……」

突起が熱い口内に閉じ込められる。厚い舌がゆったり舐っては、舌先でこりこり刺激してきた。緩急のある責めに頭がついて行かない。

無意識に力の入らない手で胸板を押し返すが、何の解決にもならなかった。むしろ、わざとらしくじゅるる♡と音を立てて吸われ、目の前がバチバチ火花を散らす。

「あああッ！？♡まって、これ、やば……んんっ！♡」

「気持ちよさそうで嬉しい。乳首弱いんですね」

ストラックスと一緒に下着を取り払われ、もう身体を隠すものが何もなくなった。冷房が効いてるのにじっとりと汗ばんだ肌を確かめるように、腰からゆっくりと望月くんの手が下へ降りていく。

反射的に逃げようとシーツを掴んでも、太い指がクリトリスを包みこむことを止められなかった。

「そこ、きたな……ッ！ふ、んんんんッ！！♡あ、あ、ああんッ♡ひ、あ、きもち……♡もちじゅ、き、く♡」

「クリも好き？どうするのが好き？とんとんする？それとも強い方がいい？」

「あっ、あっ、くう……♡それ、くちゅくちゅ、して♡ひ、ああッ！ああああああああッ！♡♡」

へこへこ腰を揺らして媚びるように望月くんの手にクリを擦り付ける。  
目の前が白くぼやけて、気持ちいいことしか考えられない。

ぐちゅぐちゅ♡♡ちゅくちゅくっ♡♡

「あ、イクイクイク……っ！！♡だめ、も、……♡あ、あ、ああ……ッ！  
♡♡♡」

「イっちゃいましたね。びくびくしてかわいー」

「は……はあ……ッ♡うるさ、い……」

倦怠感でシーツに腕を放り出す。人に触られるなんて久しぶりで、乱された自覚が今になって湧いてきてじわじわ顔が熱くなった。

恥ずかしい。なのに、もっと触って、見てほしい。

愛おしそうに見下ろしてくる後輩に、すべてを委ねてしまいたい。それでも僅かな理性が私にブレーキを掛けてくる。

きゅっと横になって身体を丸めていると、望月くんの指が後ろから秘部に押し当てられる。

「ひ……、それは、ちょ……あ、ああ♡」

「怖くないですか？入れても大丈夫？」

「う、はあッ♡あ、ああ……ん♡」

つぶ……♡

ここまで来たら逆に止めないでほしい。太い指が割り開いて押し入ってくる。響く水音が自分の愛液だと思えば、羞恥心で気が遠くなった。

「痛かったら、言ってくださいね。しっかり解すんで」  
「はうっ♡はあ……はあ……んあっ♡そこ、やば、あああんっ！♡♡」  
「有馬さん、可愛い。すき、大好きです」  
「それで……ッ、騙されるとおも、わないで……！」

生理的な涙を浮かべた目で睨んでも、望月くんは興奮したように唇を舐めて笑った。

「ああんッ！♡ね、も……いいから、あ♡やめ、も、うう~~~~ッ！  
あ、そこやだ、むり、むりだってえ♡♡♡」  
「もうGスポも覚えたんで、ちゃんと気持ちよくできそう」  
「ひ、ああああっ！♡そこ、ばっかあ！！♡ふ、う、も、イきたい  
……♡♡」

一体何時間、ナカをこねくり回されただろうか。G スポやらその奥やら、自分が知らない快感ポイントもことごとく弄られ、身体に熱がどんどん蓄積されていく。それでも決定的な刺激は無く、なかなかイけない。

「おねが、いっ！イきたい、イかせてえ……♡」  
「あ、ちょっと！クリ触っちゃだめ。俺で感じて？」  
「も、つら……♡あ、んあっ！♡は、ううううっ！！♡むりい！やあ  
……は、ああ……♡♡」

前を触ろうとした腕をシーツに縫い付けられ、3本の指を体内でバラバラに動かされる。

もうイきたい、ずっと気持ちいい。少しでも楽になりたかった。

うわ言のように懇願する私を見た望月くんは、ご馳走を前にした獣のそれで。恐怖心と求められている悦で頭がぐちゃぐちゃに溶けていった。

なんでこんなことになったんだっけ？いつから私のこと好きなの？

私、望月くんのこと……好き、だよ。だってこんな恥ずかしいのに、嬉しいし。これだけ全部求められて、気持ちよくて、優しくて、嫌じゃなくて。ちょっと怖いけど、全部任せてしまいたい。

ぐるぐる回る思考は、やがて一つの結論に収まっていく。

ていうか、セックスする以外、そんなに変わらない？じゃあ、もういっか。

すたとんと腑に落ちると、しがみついていた理性が崩れる音がした。まだ一切服を脱いでいない望月くんの腰に足を回す。もっと、もっと強く。

「もちづきくん……、もっと、イかせ、て……♡」

「……やっぱ」

普段あれだけうるさいのに、ぼそっと一言呟いて部屋着も下着も全て脱ぎ捨てていく。鍛えられた身体を見て鼓動が早まる。

バキバキに勃起した陰茎が秘部に、ひたりと押し付けられた。

熱い。きゅっと力が入って先っぽを誘うように動く。

恥ずかしい、やめたいのに目が離せなくて、おっきくて太い肉棒を見つめ熱い息を吐いた。

「ちょっと、見すぎですって」

「だ、だって……」

「ねえ、有馬さん。もっかい聞いていい？」

「ふ、うんッ！！♡」

ぐりっ♡

少しだけ亀頭が中へ押し込められる。鈍い痛みの奥に予想できない快感が見え隠れして怖い。

シーツを掴んで唇を噛むと、優しく親指で撫でられた。

「有馬さん、彼氏いたことありますか？」

「はっ、ああ……♡」

「ねえ、教えて？」

「う"っ！？♡♡あ、いた！♡いた、けどお……！♡ふ、んん……、こんな、気持ちいい、えっち、してな、い！うっ、ひ、ああああああああああんッ！！♡♡♡」

ずぶぶぶぶ！♡♡♡

自分の意思に反して身体がしなる。腰を掴まれ奥に割入る陰茎はナカをぐりぐりと擦っていく。痺れるような快感にシーツを蹴った。踏ん張る力もなく、引き寄せられるがまま、どんどん奥に侵入されていく。

「へえ～そうなんですね……」

「あ、あ"あ"あ……♡やば……、ん"ん♡んあ、う"あ、ああん……♡」

「今後は俺だけに抱かれるんで、関係ないですけど」

にゅぶ……♡くちゅ……♡

ゆっくりのストロークがどんどん身体の力を奪っていく。頭が痺れて、自分が溶けていく感覚。

過去、彼氏はいたけど相性が悪くて、そこまで回数はシなかった。前後不覚になるような刺激はこれが初めてで。

怖い、ふわふわして、わけ分かんなくなる♡

「もち、ちゅきく……♡は、たすけ……♡♡」

「大丈夫、ゆっくりね？ぎゅーしますか？」

「うん、うん、あんっ！♡あ、きもちよすぎて、かわいい♡♡」

「えっちすると、有馬さんのほうが甘えん坊ですね♡よしよし、大丈夫♡」

「あ、ああ！♡ふか……う、あ、あ、あ"あ"あ"ああんッ！♡は、は、ふう♡♡」

厚い上半身に包み込まれて、安心感と共により深く肉棒が突き刺さる。子宮をぐりぐりねじ込むように動かれ、生理的な涙が顎を伝って落ちていった。

しっとり汗ばんだ背中に必死に縋り喘げば、中で熱が大きくなる。

「あっ、おっき……♡」

「耳元で可愛いこと言わないでください」

「はは……あっ、きもちい♡望月くんの、あつくて、おっきいちんこ♡あう♡もっと、ちょーだい？♡」

「ねえ〜わざとでしょ！！」

情けない声を出して、私のナカで脈打つのが面白い。望月くんが私を求めて、悦んでるのが気持ちよくてたまらない。

わざと下品なことを耳に吹き込めば、抱きしめたまま、腰を打ち付けてくるスピードが上がっていく。対抗するように目の前の耳を舐め上げ、耳たぶを甘噛みした。



ぱちゅぱちゅぱちゅ！♡くちゅくちゅっ、れろ～～♡

「あっ、ちょ、有馬さ……！」

「あんっ！ふ、あ、ちゅる……♡はむ、んう……あ"あ♡はっ、きもちい？んん！♡」

「んっ……気持ちいですけど……！もう！」

「あっ……？♡あっ、まっ！あ"あ"あ"あああああああ！？♡♡はや、あ、おもいいい！♡ごめ、ごめんって！♡やめ、あ、イクイク、い……♡♡う"~~~~~んんッ♡♡♡」

どちゅどちゅどちゅ！♡パンパンッ！♡

腰を掴まれた手の力が強くなり、どんどん動きが激しくなる。

浮かんで、ふわふわして、自分がどこにいるのか分からなくなりそう  
で、必死に背中へ爪を立てた。

望月くんの肩に口を押し付けて、全身で刺激を受け止める。

いや、こんなの受け止めきれない！♡

「お"っ、お"っ、お"お……♡あ、あ"あっ、しぬ♡も、いったから、あ！  
♡♡あ、あっ、ん、ん"あああ♡♡」

「死なないで？はっ、あ、好き……可愛い♡絶対幸せにするんで♡」

「あ……っ！まって、そこぐりぐり……ッ！♡はっ、あ、ひいんッ♡♡なん、か……くる！イグ！イ……くッ！！♡あ"あ"あ"ああああッ！！  
♡♡♡」

ぎゅうううう♡びゅるるるる！！♡♡

全身に力が入ると、ナカで望月くんのものをありありと感じてしまって、そのまま果てた。余韻に浸る間もなく、ドクドクとゴム越しに脈を感じる。

断続的に痙攣し、やっと力が抜けた。まだ足りない、と言わんばかりに奥へ奥へと塗り拡げる動きにも感じて声が漏れる。

「あう……♡んう、ああ……♡」

「は……、ぽやぽやしてる有馬さん、かわい……♡」

「んちゅ……っ、はあ♡もち、ぢゅきくん……♡」

ゆったりしたキスが、まだ戻ってこれない身体を溶かしていく。なんか言ってるけど、分かんない。

気持ちいのとたくましい身体に包まれて、覆いかぶさってる望月くんの首に腕をまわした。

もっと、もっと気持ちよくしてほしい♡温かくて、安心する。

「ごめんね、有馬さん。ずっと欲しくてたまんなかった。もう彼氏作らないでください。ずっと俺の隣にいて……？」

「んあ……？♡えへ、しょーがない、なあ……♡♡」